

日本ロレンス協会ニューズレター No. 43

2022年9月10日

日本ロレンス協会 会長 石原 浩澄
副会長 木下 誠

会員の皆さまにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

先の全国大会におきまして、協会の執行部新体制をご承認いただきました。微力ながら本会の発展のために努めてまいります所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。本日は執行部を代表しまして、新体制下第一弾の「ニューズレター」をお届けいたします。

さて、まずは今年度大会のご報告です。今年度は第53回の全国大会でした。高知県立大学での開催を予定していましたが、2020年からの新型コロナウイルス感染症の拡大に収束の兆しが見られず、昨年につきましてZoomを活用したオンラインでの開催を余儀なくされました。研究発表2件、シンポジウム1件のご希望がありました。報告の数に鑑みて、当初予定を変更して1日に収めるべきか、あるいは多少時間に余裕を持たせて、従来通りの2日間開催にすべきか、執行部では種々議論致しましたが、オンライン開催の利点も活かしつつ、1日開催とするという結論に至りました。大会は6月19日（土）に開催されました。

研究発表は、井上麻未氏と武藤浩史氏によるものです。井上氏は『息子と恋人』における病いと語り」と題して、「医療・看護・保健」の分野と人文学分野との創造的統合をめざす学際的な研究領域として注目を集めつつある“Health Humanities”の視点から『息子と恋人』の語りに切り込むという斬新な取り組みを披露されました。一方の武藤氏は、

「*Aaron's Rod* のスピリチュアリティ——出版100周年を祝して」というタイトルの下、*Aaron's Rod*のスピリチュアリティに着目し、啓蒙思想を乗り越え、霊肉二元論を脱構築しているような動きを、小説的テキストの精査を通して論じられました。

短時間の休憩をはさんで、シンポジウムが開催されました。大山美代氏の司会進行の下、「D・H・ロレンスの言語表現の独創性」と題して、4名の講師による発表が行われ、それに関する参加会員との活発な質疑応答が行われました。発表は、司会も務められた大山氏による「ロレンスの“agony”と“anguish”をめぐる思想と表現技法の展開」、加藤彩雪氏の「D.H.ロレンスの『多彩』な“darkness”」、田島健太郎氏の「D.H.ロレンスの初期～中期作品における同性愛的表象」、そして大江公樹氏による「後期ロレンスにおける『純粹』探求の展開」、です。4名の講師それぞれが関心を寄せるロレンス独特の言語表現に着目し、丁寧にテキストに沿いながら、そして各講師のテーマに迫っていくという、力強く、かつフレッシュな発表・シンポジウムとなりました。

プログラムに沿って「総会」（内容に関しては下にご報告しています）に続いて、「懇親会」

が開催されました。コロナ禍の3年間において、会員間の交流が図れていないのではという田部井世志子前会長のご心配に端を発し、オンラインでの「実験的な」懇親会を催すこととなりました。飲み物片手に「乾杯」の後、「ブレイクアウト・ルーム」に別れて、研究発表のこと、近況報告など、当初の心配を払拭するように、楽しい交流の機会を持つことができました。

研究発表やシンポジウムをはじめ、オンライン大会の様子については、協会のホームページ「全国大会」→「53回レポート」をご覧ください。当日の写真入りで詳しい報告が掲載されています。

次に、総会での審議および決定事項をご報告いたします。

1. 新執行部委員の選出等について

今年度は大きな異動の年でした。学会誌にも掲載されますが、ホームページの「協会役員等」の項目をご覧ください。

2. 評議員の選出について（関東地区、中部・近畿地区）

関東地区において、これまで務めていただきました大平章氏、倉田雅美氏に代わってあらたに井上麻未氏、麻生えりか氏が選出されました。また、中部・近畿地区においては、有為楠泉氏に代わって、岩井学氏が選出されました。

これまで務めていただいた3氏におかれましては、どうもありがとうございました。そして新たな評議員の方々に対しましては、どうぞよろしくお願い致します。

3. 2023年度 第54回大会について

・開催校について：

高知県立大学（永国寺キャンパス）において開催することが承認されました。

ご存じのように、ここ数年のコロナ禍にあつて開催を予定しながらも集まることできませんでした。毎回大学との交渉にあたっていただいている開催校の鳥飼真人氏にはこの場を借りてお礼申し上げます。

・日程：

大会当日の時点では「未定」でしたが、その後のやり取りの中で、6月17日（土）・18日（日）に開催することが決定いたしました。

4. 会計報告

会計の鳥飼真人氏より、2021年度決算報告および2022年度予算案の報告・提案があり、会計監査報告の後、承認されました。

その他、報告等

1. 会員数について

庶務の高田英和氏より報告があり、現在の会員数は94名です。

2. 研究助成について

・大会研究発表のための助成制度

専任職に就いておらず、かつ公的な機関から研究費を受け取っていない会員に対して、本協会大会で研究発表（シンポジウム講師等の担当を含む）をする際の費用の一部を助成するための制度。<http://dhlsj.jp/dl/josei.pdf>

・和田静雄海外研究発表助成制度

専任職に就いておらず、かつ公的な機関から研究費を受け取っていない若手会員に対して、海外の学会でD・H・ロレンスに関する研究発表を行う際の費用の一部を助成するための制度。<http://dhlsj.jp/society.html>

以上、ご報告いたします。

(最後に)

他の多くの学会や、大学の諸行事に漏れず、われわれの協会でもこの3年間というもの、オンラインという、何かと不自由な空間での集まりを余儀なくされてまいりました。この間、執行部でも試行錯誤を重ねてまいりましたが、会員の皆様からも多くのお知恵とアイデアをいただきてまいりました。急なお願いや予定の変更などにもかかわらず、諸企画の実施にご尽力をいただきましたすべての皆様に対しまして、あらためてお礼を申し上げます。

ここ数年の決まり文句のようになってしまいましたが、来年こそは高知でお会いしたいものです。

開催の形態は異なれども、（言うまでもありませんが）われわれの基本は「研究」です。それぞれが取り組んでいる研究の立ち位置や意義に常に意識的でありながら、「全員参加で」協会の議論を旺盛に盛り上げていきましょう。コロナ禍という特殊な状況が、自身の研究に刺激を与えた、あるいは異なる視点を提供した、という方もいらっしゃるかもしれません。

「最近少しロレンスのテキストから離れていて…」という方も、そうした現在のご関心は多くの会員の研究にも刺激的であるに違いありません。先に発信しました「アンケート」でもお願いしましたが、いろいろなお考えやアイデアをお寄せください。そして、若手・中堅・ベテランを問わず、研究発表、シンポジウム、論文投稿をご検討ください。

次回大会では、多くの会員の皆様とお会いできますことを楽しみにしています。